

われもこつ 第16号

2003年12月20日 発行



私の町の自然のつながり

土屋貴子

私の町はサクラソウがさいています。

私の町のサクラソウはトラマルハナバチのおかげでさいています。

トラマルハナバチはねずみの古巣に

くらしています。つまりねずみのおかげですんでいます。

ねずみは自然にすんでいます。

しかし、自然がきえればねずみもきえ

トラマルハナバチもきえ

私の町からサクラソウはきえます。

つまり私の町のサクラソウは

自然のつながりでさいています

それはあたり前の事かもしれないけど私にとっては、とてもうれしい事です。



軽井沢東部小6年 土屋貴子さんの詩が、環境省「こどもエコクラブ」パートナーシッププログラム“エコジロー”の「かんきょうの詩」に入賞されました。

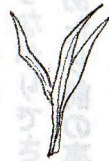
また、東部小6年 西尾美優さん、佐々木彩妃さん、小林瑠莉さんの3作品も佳作に選ばれました。

栗岩竜雄さんにおしえてもらった。

〈軽井沢の蝶と蝶の好きな植物のこと〉



12月24日「チョッピリ勉強会」で、小学生のころから30年にわたって、軽井沢町内に生息する蝶を研究していらつしやる、栗岩竜雄さんのお話を、スライドをまじえて伺いました。

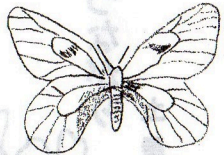


蝶は卵、幼虫、まなこ蛹、成虫の4段階の生活をしますが、種類によって成虫になる時期が違います。生息環境も森林、草原、湿地、里山、農耕地周辺、川沿いなどその種類によって異なります。自由に飛んでいるように見える蝶も、意外と狭い範囲で暮らしているのです。蝶は花に舞って蜜を吸い栄養分を得ていますが、種類によっては樹液を好んで吸うもの、獣糞に群れたり、地面に含まれる塩分をとったり、人の汗を吸うものもあるそうです。

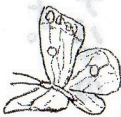
また蝶は幼虫時代に食べる草・樹が種類によってそれぞれ違います（食草・食樹）。

たとえば、ウスバシロチョウはケシ科のムラサキケマン、エゾエンゴサクを食草とし、モンキチョウはマメ科のクサフジ、カラスノエンドウなどが食草です。オナガシジミは、クルミ科のオニグルミ、サワグルミを食樹としています。

このように多種多様の植物を食べ分けているのです。ちなみにワレモコウを食草とするのはヒヨウモンチョウとゴマシジミですが、どちらも現在軽井沢では見られないそうです。



ウスバシロチョウ



モンキチョウ



クサフジ



オナガシジミ

栗岩さんは、今までに軽井沢町内で113種類のチョウを確認されていますが、近年減少が著しく20種類が危機的段階で何らかの保護対策をとらないと絶滅の恐れがあると心配しておられます。蝶を保護するのには、幼虫の食草（食樹）を守る必要があります。特に草原が開発によって無くなるのにつれて、

草原の蝶がどんどん姿を消しています。

私たちが保護、育成にしている野草も、もちろん野鳥も、昆虫すべても昔に比べて激減しています。

自然の豊かさを売り物にしている軽井沢の現状はお寒い限りです。自然界の仕組み、生き物の生態を知って真に豊かな自然を取り戻す努力を早急にしなると、取り返しのつかないことになりそうで心が痛みます。それぞれの専門分野の方々が情報を交換し、手を取り合って、未来の軽井沢のために自然保護対策を講じていただけたらと切に願っております。



(小泉 洋子)

軽井沢にもいた・・・はなさかじいさん



春の盛りに、新緑の中にソメイヨシノより濃いピンクの花を咲かせてくれるオオヤマザクラ。今では、町のあちこちに見られますが、昭和40年ころまでは、小瀬林道のわきと、発地に、わずかに自生していただけでした。

植木屋さんの岩井正信さんは、町中にオオヤマザクラをふやそうと、種を採り始めました。岩井さんは、昭和45年ころから、自分の庭でオオヤマザクラの苗を大切に育て始めました。

オオヤマザクラの苗は、とても丈夫ですくすくと育ち、2年後、岩井さんから3千本の苗が、町に寄付され、町中に広がりました。

春が来て、オオヤマザクラが咲いたとき、はなさか爺さんがいたこと、思い出してくださいね。

○花の時期・・・4月下旬から

○主にみられるところ・・・旧軽口タワー、矢が崎公園、風越のグラウンド、ごみ処理場の南の土手、浅間台の道路、学校の周り、そのほかたくさん

しばらく作物を
つくらないから
自然にかえって
休んでいてね。



軽井沢の休耕田では、アサマフウロやオグルマ、ツリフネソウなどさまざまな野の花が咲き乱れます。



必要になったら
いつでも
耕せるよう
待ってるよ!!

この本
おすすめ!



思います。

参考文献/日本生態系協会発行
「エコシステム」2003年9月号

休耕田はムダな土地？

軽井沢はオオジシギの
国内でも数少ない
繁殖地の一つです。



いいえ、
私たちの人間にとっても、必要な場所なのです。

夏の水田はたった一種類の植物「イネ」がびっしり生えているだけで、たいていの水鳥はエサを探ることができません。だから夏の時期、浅く水が張られた休耕田が重要なエサ場となります。また、ヨシやガマが茂った休耕田では、ヨシゴイやヒクイナといった野鳥が巣作りしたり、ホオジロの仲間が冬を越す場所になっています。休耕田は湿地の植物の生育場所でもあります。日本全国、湿原が減ってしまっている。絶滅の危機に瀕している植物は少なくありません。絶滅したと思われる昆虫が休耕田で再び発見された例もあります。

休耕田は多くの生き物にとって避難場所になっているのです。

それに、近い将来お米を作らなければならぬ時が来るかもしれません。その時まで休耕田に生えている植物や、昆虫、ミミズ、微生物たちが土作りを続けてくれます。もしコンクリートで固めてしまったり、家やビルを建ててしまったり、水田や畑に戻すことは簡単にはできないでしょう。

日本の食料自給率は約四〇%（カロリーベースで計算）、つまり六〇%は輸入に頼っています。でも異常気象や砂漠化、戦争のせいで農産物が収穫できなくて、どこの国も日本に食物を輸出してくれなかったら……！ という緊急時にすぐ農産物を作れる土地＝休耕地をつぶさないことが大切です。



もともと湿地だった水田を畑地にするには、排水をよくするために水路をコンクリート化するなど、環境に与える負荷が大きく、多くの生物を失わせることになります。

コロボックル物語①

『だれも知らない小さな国』

佐藤さとる 作 村上勉 絵

講談社 青い鳥文庫

『ちいさいおうち』

お話と絵 パージニア パートン

岩波書店

どちらも五〇年近く前から、子供だけでなく大人たちにも愛されてきた本です。小さいときからこんな本に触れていると、いつの間にか、自然とお友達になって、「ちいさいおうち」や「森の小人コロボックル」を応援したくなるのではないのでしょうか。自然破壊などという難しいことでなく、クリスマスやお正月、こんな本も楽しみながら、親子で楽しむといいなと思います。

シシユウカライレブンスとの

出会いと別れ



星野裕一

郵便をとりに行つて、郵便ポストを鳥が巢にしよ
うとねらっているのではないか、と思つたのは、今
年の五月十五日頃のことです。

巢材のコケがかなり大量に持ち込まれ、卵が転が
り落ちないよう、産座の窪みもできていました。「卵
を産んでもここでは無理だよ」とコケを取り除いて
いましたが、ある朝、ポストの中の新聞に、無数の
つついた跡があるのです。せっかく作り上げた家を
元に戻そうと、じゃまな新聞を小さくちばして取

り除こうとしていたのです。

「ここまで執着するなら、このポストはしばらく
彼らに使つてもらおう」と、早速別の郵便受けを近
くに設けました。翌日から産卵が開始され、一日一
個ずつ増えて、とうとう十一個になりました。

「抱卵中は、比較的巢を放棄しやすい」と言われ
ていますが、のぞき魔の衝動にかられて上ぶたを上
げてみると、気はつくものの、じっと抱卵に専念し、
目や頭をわずかに動かすだけでした。

五月二九日、親の留守中にのぞくと、全員が孵化
し、目の見えない裸のヒナが口をあけ、えさを求め
ていました。シシユウカライレブンスの勢ぞろいで
す。気温が低いときは、えさとりはオスの役目のよ
うでした。一週間以上たつと、ヒナにも暖かな羽毛
がはえてきました。

数日後、箱の親鳥が、私たちを警戒するようになりました。巣に近づいてみると、箱の下の白壁に、動物の足跡がびっしり。箱の上にも出入り口にも、無数の爪あとがあるのです。猫の仕業です。

効果はわかりませんが、ペットボトルに水を張り、巣の下に並べ、水道の水をちよろちよろとかけ流しておきました。

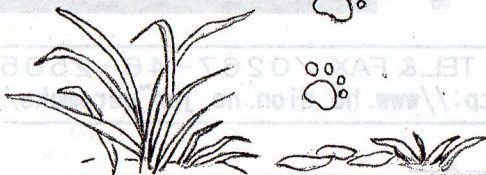
十六、七日目になると、ヒナは産座からはい出し、好きな場所へ移動して飛び跳ねるようになりました。でも何かあると（例えば、私がおそくと）一カ所にまとまってじっと様子をうかがいます。

六月一五日、用を済ませて家に戻ると、箱の上にはちよこんと一羽ヒナが座っています。しばらく目を

合わせていましたが、音もなく大きな栗の木に飛び立ちました。箱の中は、カラできれいでした。その後数日間は、なんとなくヒナが親に向かって出す小さな高い声がかきこえ、姿は見えませんが、近くにシジュウカライレブンスの存在を感じました。



▲ 胸の黒いネクタイとつばさの1本の白い帯が特徴です。ツーピーとさえずります。





「生態系」って

なんじつ？

「せいたいけい」って知っていますか？ 生き物は、いろいろななかかわりの中で暮らしています。生き物同士が、餌になったり、助け合ったり、競争したり…。また、住んでいる場所の状態によっていろいろな様子で暮らしています。その関係全体を、「生態系」（英語では、エコシステム）と言っています。生き物には、それぞれに大切な「生態系」があってそれなしでは生きていくことはできないのです。

だから、小さな水たまり一つも、その中にはたくさん微生物がすんでいたり、チョウが水を飲みに来たり、植物が水分をもらったりしているの、ひとつの「生態系」と言えます。私たちの暮らす地球は、数え切れないほどの「生態系」があってそれが複雑にからみ合うことによって生き物が生きていくということがわかってきました。

宇宙旅行もできる時代だけれども、地球の生態系のかかわりについては、だれも知らない不思議がたくさんあるといわれています。皆さんも大きくなってこの不思議を解き明かしてほしいな。

私たちがよく知っている「生態系」には、この表紙の土屋貴子さんの詩にもあるサクラソウ、トラマルハナバチの共生関係や、それを取り巻く野ネズミ、フクロウなどの関係があります。

地球ができて四十六億年。たった数百万年前に生まれたヒトという動物は、今では、地球の気候も変えるほどの大きな力を持つようになりました。軽井沢の夏も暑くなってるよね。

残念なことには、有限の地球なのに、まだ、「人間は、無限に好きほうだいできる。」「自然を壊すことが進歩だ。」と考えている人がいます。人間のしていることによってたくさんの生き物が暮らす「生態系」が破壊され、世界中に一つしかない

われもこうの会
総会のおしらせ

日時：2004年2月1日（日）
 午後1時30分より

場所：軽井沢町中央公民館
 講義室

＊会員になってみようかナ…という方もぜひ参加して下さい。

命が失われています。（戦争は一番ひどい生態系の破壊といえます。）

軽井沢町には、まだまだたくさん「生態系」が残っています。みんなが大きくなって、みんなの子どもたちがおとなになるころになっても、ずっとずっと軽井沢の自然が元気でいてほしいと思っています。

「自然は一度破壊すれば、真の意味では復元は不可能なのである。」（原寛博士）